

佐久間孝正著

『在日コリアンと在英アイリッシュ：オールドカマーと市民としての権利』

(2011 東京大学出版会)

佐藤亨著

『北アイルランドとミューラル』

(2011 水声社)

戸谷 浩
(PRIME 所員)

やや異例かもしれないが、上掲2冊を併せて書評したい。2冊の書は、アイルランドを対象としていること以外、内容が大きく重なり合うということはない。では、なぜそうした2冊を並べて書評するのかということ、2011年7月に同僚のT・P・ギル教授が学部内の研究会において、「宿痾としての都市風景：西ベルファストの壁画を見て」のタイトルで報告をされたことが一つのきっかけとなった。そのタイトルと報告の内容に促される形で、上記近刊書の存在を知ってはいた評者の中で、2著が親しくつながることになった。

佐久間の書はその「あとがき」にもあるように、書名とはやや裏腹に、「アイルランドにしる韓国にしる、両国を直接に比較することが本来の目的ではない」(273頁)としている。主たる目的とされているのは、デニズン(「合法的な永住者の資格を有する外国籍市民」、129頁)としてのコリアンとアイリッシュが暮らす日英の方の比較研究である。ただ、手法としては、「日英を直接比較するのではなく、双方の隣国に対する植民地化との関係で、その後のオールドカマーの置かれている『市民』としての状況を比較する」(273頁)視座

が採られている。

他方、佐藤の書は、北アイルランドの街に描かれたミューラル(壁絵)が語りかけているものを、多数の写真と共に解説する「写文集」(8頁)となっている。プロテスタント、カトリックの双方が描くミューラルは、あるものは自身のアイデンティティを謳い、あるものは歴史を再認識させ、またあるものはただただ戦闘的で、人びとを鼓舞する内容を持つ。ミューラルとは、北アイルランドという身体に彫られた「刺青のようなものかもしれない」(131頁)とする佐藤は、それでも「それは植民地という刺青、暴力という刺青、そして平和という刺青」(131頁)でもあると言う。なぜなら、「平和とは遠くからやってくるものではない。平和とは内側に紛争という傷(記憶)を抱えながら、身体の表情を、痛みをこらえつつ、変えること」(131頁)であるからだと言う。

以上のごく簡単な要約からも判るように、また冒頭にも述べたように、2著の間では、その共通項よりも相違点を探す方が大いに容易い。相違点の最たるものを挙げるとするならば、着眼する対象の違いが挙げられよう。佐久間は、「移民」や

「移住」、「市民権の現況」といった言わば「フロー」な諸側面により着目し、社会学者らしく比較を通して、モデルの構築や一般化を志向しているように思われる。それに対して佐藤は、何よりもまず歴史的、文化的な方向に沈潜してゆく。「ベルファスト、デリーという身体に彫られた刺青」(131頁)への志向は、ミューラルが街や通りを見下ろして、肅然として立つ壁絵であることに象徴されているように、それは正に「ストック」への拘りと言えまいか。確かにミューラルは日々刻々と生まれ変わっている。白く塗られたり、別のミューラルが上書きされたりするからである。しかしながら、「壁は白く塗れば新たなキャンパスとなるが、白という不在を示す色はかえって以前のミューラルの記憶を人びとに喚起する」(131-132頁)と佐藤は考えている。そこに人びとの、あるいはコミュニティの歴史を見るのである。

「ストック」にだけ拘る姿勢に問題がない訳ではない。「ストック」に拘るということは、往々にして、構造を静態的に考えたり、物事を固定化して叙述する方向に人びとを導きがちである。ミューラルが放つメッセージの最も分かり易く、かつ一般的な理解は、強固なる二項対立の図式であろう。イギリス人／プロテスタント／ユニオニストの側なのか、アイルランド人／カトリック／ナショナリストの側なのか——それだけで、全てを判断してゆく思考のあり方である。

しかし、現地のコミュニティ関係を仔細に追った、北アイルランド研究者尹慧瑛によれば、北アイルランド社会が現に直面している、より深刻な分断とは、上記のような分かり易い二項対立の図式ではなく、例えば、「暴力から距離をとることができるために問題にかかわらずにいられる人びと」(つまり<より多くの選択肢をもつ人びと>)と「暴力と隣りあっているために問題に向きあわざるをえない人びと」(<選択肢の限られた人々>) (尹、204頁)との間に存する格差だそうである。

そして、この格差が拡がる中で、二項対立の図式を跨ぐ形で大多数の人びとが選んでいるのが、「和平プロセスという言葉から安易に想像できるようなコミュニティ間の越境よりも、互いに距離をとることで保たれる過渡的な『平和』」(尹、204頁)なのだそうである。

日本人と朝鮮人の関係の歴史においても、一般的な支配／被支配といった二項対立の図式には、近年、異論も唱えられているようである。その一つが「植民地公共性」の議論である。これは「民族主義的な文脈でしか評価されてこなかった植民地期の社会相を再定義しようという問題提起」であり、「総督府権力(在朝日本人社会を含む)と(朝鮮の——評者)都市・知識人社会」の間に「抵抗と協力が交差する」[『政治的なるもの』=公共領域が位置していた](趙、289頁)ことを主張する立場である。

この主張に対して、朝鮮近代史家の趙景達は、朝鮮民衆は一貫してこの「植民地公共性」から排除されていたことを強調し、歴史学の使命は、「コロニアリズムとナショナリズムの『共犯関係』」(趙、304頁)を明らかにすることのみならず、伝統的価値と共に生きる土着的な民衆の「下からの眼差し」(趙、306頁)を、常に保持することの重要性を訴えている。

佐久間の書で詳述される在日コリアンを取り巻く現状を理解する前提としても、趙の主張は全面的に首肯しうるものである。ただ、それでは、この「植民地公共性」の是非の議論を経ても、日本人と朝鮮人の間に横たわる支配／被支配の図式は強化されることはあっても、依然として乗り越えられぬままとなる。都市・知識人社会は別にしても、朝鮮民衆と日本の統治権力層はやはり相容れるものではなかったことになるからである。もちろん、ここで評者が言挙げする意図は、支配／被支配の図式を見直すべきだという議論につなげたがためのものではない。そうではなくて、この

堅牢な二項対立の図式に捕われぬ、朝鮮民衆と在朝日本人民衆の「交流」や「日常」はなかったののだろうか、あるいは、それはこれまで看過されては来なかったかという問いである。北アイルランドの人びとがそうであるように、人は、第三者にとって分かり易い、ステレオタイプの中だけに生きるものではないであろうし、民衆史は本来、国境線によって分け隔てられるものではないであろうからである。

*

佐藤の書の末尾に、印象的なミューラル（正確には、絵でなく文字だけが書かれたグラフィティ）の写真が掲げられている。佐藤は nation を「国」と訳しているが（130、132頁）、評者はそれを「国民」ないしは「人びと」と解したい。

A nation that keeps one eye on the past is wise. A nation that keeps two eyes on the past is blind.

（過去を片方の目で見続けている人は賢明である。過去を両の目で見続けている人は盲目である。）

ある偶然から佐久間の書と佐藤の書が、東欧近世史を専門とする、アイルランドに対しても、朝鮮に対しても門外漢に他ならない評者の中で結び付き、結果として、行く先も知れぬ思わぬ思索の旅に出ることができた。今はただ、そのことを素直に喜びたい。

参考文献

竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店、2009年

李昇燁「『顔が変わる』：朝鮮植民地支配と民族識別」、竹沢泰子編上掲書所収、136-159頁

趙景達「暴力と公論：植民地朝鮮における民衆の暴力」、須田努ほか編『暴力の地平を超えて：歴史学からの挑戦』青木書店、2004年所収、275-313頁

尹慧瑛「北アイルランド紛争を生きる：暴力とコミュニティ関係」、須田努ほか編上掲書所収、181-210頁